ぬ　ぬれちゃった

「暖冬だった去年に続いて，今年もまた暖かい冬になりそうです」
こんなニュースが毎年のように聞かれます。昔は，もっともっと寒く，雪がよく積もりました。北風も今より冷たかったように思います。

そんな冬の教室，今とは違いました。木製の窓は建て付けが悪く，ガラス係の先生（校務分掌にガラスの入れ替えの仕事がありました）が切って入れてくれたガラスと桟の間，天井板，床板，壁と柱の間，いろいろな所に隙間があって，風が遠慮なく入ってきました。私の勤務した学校も，暖房がなかったり，火鉢であったりという状況でした。そんな中で，手をこすり合わせ，手のひらに息を吹きかけて暖をとっていました。

ある年の冬，ちょっとした事件が起こりました。それは算数の時間の終わりころでした。

「アッ　N君が……」

という声に，そちらを見ると，足元がぬれていました。

「もう少し，もう少し」

とがんばっていたけれど，とうとうがまんができなくなってもらしてしまったのでしょう。青ざめた顔のN君でした。

そのとき，すぐに立ち上がったのは隣に座っていたTさんでした。彼女は，自分のいすにかけてあったぞうきんを手に取って，そっとふきました。それは，担任の私が，まだ動けないままでいたときでした。それを見た子どもたちが一斉に立ち上がりました。みんなが，ぞうきんを手にしていました。

ベルが鳴って，この時間が終わりました。隣の教室から，「運動場に行って遊ぼう」と男の子たちがやって来ました。

「やあ　しょうべんたれ　しよった」
「やーい。やーい」
はやしたてる声が聞こえました。そのとき，とびだしていったのは，Ｋ君とＯ君でした。この 2 人は，なかなかのやんちゃでした。
「何しに来てんねん。自分の教室へ帰れ」
なぐりかからんばかりの様子（ひょっとしたら 1 発くらいはあったかも知れません）に驚いた子どもたちは，教室に帰っていきました。
「用務員のおばちゃんに，お湯をもらってこよう」
数人が，バケツを持って走っていきました。ほどなく，帰ってきた子どもたちが手に持っているバケツからは，ほかほかと温かい湯気が出ていました。
　床をふき，手を洗いました。次の時間の勉強を始めたとき，そこには何事もなかったかのような静けさがありました。この日のことは，クラスみんなの秘密でした。
「隣の学級の子には言わない」
「お家に帰っても言わない」
これが，その日の終わりの会で決まったことでした。このことは，私も守りました。あれから，何 10 年か過ぎました。けれども，控えめでもの静かだったＴさん，大柄のＫ君，目をくりくりさせていたＯ君，すばらしい子どもたちの風景が，今も鮮やかに思い出されます。
　平成 8 年 3 月，私は 38 年の教職生活を終えることになりました。4 つの小学校と 2 つの中学校では，子どもたちとのすばらしい出会いがありました。感動の日々がありました。中でも，このできごとは私に子どものすばらしさを強く印象づけるものでした。そして，子どもたちとともに生きていこう，教師として一層精進しようという意欲を与えてくれました。

定年退職の年を迎えた今，「これはみんなの秘密だよ」という禁を破って，私に教師としての心構えを教えてくれた子どもたちにお礼を言いたい，そんな気がします。

……

これは，全国連合小学校長会会長の大野幸男先生からのお誘いで，第一公報社発行の「私の感動体験・教師になってよかった」に書いたものですが，この話には後日談があります。

それは，退職後 2 度目の勤めとなった奈良文化女子短大付属高校でのことです。衛生看護科の学級を担任しているＮ先生が，

「先生，このお話をホームルームでの指導に使いたいのですが，よろしいでしょうか」

とやって来ました。校内で発行されている研修資料に載せた私のこの文を読まれたようでした。そして，

「ぜひ，私のクラスの子どもたちにこの話を読ませたい。そして，いろいろ考えさせたいと思います」

とのことでした。

「看護師になる」という夢を胸に勉学に励んでいる子どもたちに優しい心，思いやりの心を培いたいという先生の学級経営に大きな拍手を送りたい，そんなふうに思いました。